

The Trans-Atlantic and Inter-Colonial Communication
Networks during the First Great Awakening in
Jonathan Edwards' *Letters*

(第一次大覚醒運動と環大西洋・植民地間交流：
ジョナサン・エドワーズ『書簡』を中心に)

Shitsuyo Masui*

SUMMARY: This study is a close reading of Jonathan Edwards' letters after the Northampton revival in the early 1730's, while examines how the Evangelical communication network fostered a new public religious culture in the Atlantic world. Although Perry Miller viewed the Puritan influence in eighteenth-century America in terms of his "declension" theory, these letters present a vision for the propagation of the gospel through Evangelical endeavor. Having witnessed the New England "awakenings" during his ministry, and being informed about the revivals in Britain and her colonies, Edwards' Evangelical concern went beyond the geographical boundaries of Puritan New England. In his letters to Scottish Presbyterian ministers, Edwards shares his speculation about the beginning of the new age in his own generation, obviously inclining to the post-millennialist eschatological view. A further topic of this study is how the Evangelical culture in the British colonies relates to the influence of continental Pietism.

* 増井 志津代 Associate Professor, Department of English Literature, Sophia University,
Tokyo, Japan.

序

コネチカット渓谷リバイバル（信仰復興）が一応の収まりを見せた1736年11月6日、ハンプシャー郡ノーサンプトン教会牧師ジョナサン・エドワーズ(Jonathan Edwards, 1703-1758)は、ボストン第四教会牧師ベンジャミン・コールマン(Benjamin Colman, 1673-1747)に宛てて長い書簡を書いた。

ハットフィールド在住の叔父ウィリアムが受け取りました7月20日付けの貴方の書簡の中で、この地域のタウンのあちらこちらで起きているすばらしい神の御業が、とかく評判になっているとのお知らせを頂きました。ロンドンのワット師やガイス師、そして月例祈祷会に集った方々にこの出来事が伝えられ、当事者である私達に、もっと詳しい状況を、知らせて欲しいと思われておられるとのこと、また、その報告者の役割を私に務めるようにとお望みとのことも叔父ウィリアムより承りました。そこで、私の知る範囲のことを、あるがまま、忠実にお知らせ致したいと思います。¹

以上のような書き出しで始まるエドワーズの書簡、『忠実なるナラティヴ』(A Faithful Narrative) は、コールマンの手で要約され、コネチカット渓谷「覚醒」(Awakening) の記録として直ちに出版される。さらに、書簡中で言及されたロンドンの牧師達、アイザック・ワット(Isaac Watts, 1674-1748)とジョン・ガイス (John Guyse, 1680-1761) は、連名で序文を付し、『ナラティヴ』の完全版を翌1737年ロンドンで出版、続いて1738年には第二版を出す。同版は出版年度を同じくし、エディンバラでも印刷され、スコットランドに行き渡る。さらに、1738年にはボストンで、エドワーズ自ら訂正を加えたとされる第三版、アメリカ版²が出版された。こうして、執筆から2、3年の間に、『ナラティヴ』は、大西洋世界で再版を重ねるベストセラーとなつたのである。

『ナラティヴ』の主題は、開拓から82年目を迎えたニューイングランド辺境の町、ハンプシャー郡ノーサンプトンにおける信仰復興による多くの地域住民の回心体験と、その結果起きた周辺共同体の変化である。エレアザル・マザー (Eleazar Mather, 1637-1669)、ソロモン・ストダード(Solomon Stoddard, 1643-1729)に続き、第三代ノーサンプトン会衆派教会牧師に就任したエドワーズは、祖父ストダードの死直後に起きた様々な困難—「大変な信仰的緩慢さ」("extraordinary dullness in

religion")、若者達の遊興問題、「アルミニウス主義」("Arminianism")の脅威一を経て、1734年の12月後半頃から、「神の聖靈が驚くべき形で、私達の中に働き始めた」³ 経緯を子細に渡り報告文にしたのだ。

エドワーズが信仰復興の現場として紹介した、「ハンプシャー郡ノーサンプトン」は、マサチューセッツ植民地内陸部コネチカット渓谷に位置する、全戸数にして200程の辺境の町であった。ロンドン版の編集者達は、タイトルページで新大陸の「ハンプシャー郡」(Hampshire County)を「ニューハンプシャー」(New-Hampshire)と間違えて印刷し、これが1738年版でも訂正されなかった程、イングランドから見れば遠隔の地である。こうした辺境の一介の牧師による報告が、再版を重ねるベストセラーとなり、「エドワーズ」、「ノーサンプトン」、「大覚醒」といった用語はただちに英国、ヨーロッパ大陸へと広まった。『ナラティヴ』の出版により、アメリカ植民地の周縁で起きた出来事は、地理的境界を越え、大西洋の両岸で共有体験とされた。

20世紀ピューリタン研究の大家ペリー・ミラー (Perry Miller, 1905-1963) は、その著書『ニューイングランド・マインド、コロニーからプロヴィンスへ』(*The New England Mind: From Colony to Province*, 1953) の中で、17世紀末から18世紀初頭にかけて、植民地が英帝国のプロヴィンスとなって行く過程をピューリタニズムの「衰退」(Declension) から「混乱」(Confusion) の時代と見た。⁴ しかし、この時代、エドワーズ等ニューイングランド・ピューリタニズムの後継達が盛んに用いたのは「復興」(Revival) あるいは「覚醒」(Awakening) という用語であった。そして、この用語はニューイングランドのみならず中部植民地でも流行する。ニューヨーク、フィラデルフィアの両港湾都市を抱える中部植民地は、スコットランド、アイルランド、オランダ、ドイツ系移民を多く迎え、文化的、宗教的には後にアメリカを特徴付ける民族的・宗教的多様性が最も顕著な地域であった。多くの移民を抱える新興の中部植民地、そしてピューリタン・ニューイングランドは「大覚醒」という極めて似通った宗教的体験を共有する。本稿では、第一次大覚醒期、精力的な著述活動によりリバイバル推進に貢献したエドワーズの、特に書簡に注目する。エドワーズ周辺史料を探ることにより大覚醒期の環大西洋、植民地間交流を辿り、さらには、ミラーのいわゆる「衰退論」(Declension theory) を再考したい。

1. 環大西洋交流ネットワークの成立

ミラーの『ニューイングランド・マインド』は、出版から半世紀が経つた今でも、アメリカ植民地時代思想史研究における最も重要な書物に数えられる。ミラー以後の研究者達は、その功績を受け継ぎつつ、新しい解釈を打ち出して來た。⁵ 例えば、ネッド・ランズマン(Ned C. Landsman, 1951-)は1997年出版の『コロニアルからプロヴィンシャルへ』(From Colonials to Provincial: American Thought and Culture, 1680-1760)の中で、プリンストンを中心としたスコットランド系長老派の例を挙げて、18世紀アメリカ精神はニューイングランド・ピューリタンの独特な歴史にルーツを持つ者たちだけでなく、ピューリタンをも含めた「リフォームド」(Reformed; Calvinism)の伝統にある英國、ヨーロッパ系移民が広く融合して形成されて行つたのだとの見解を示している。⁶ この視点は1972年、イエール版ジョナサン・エドワーズ全集第四巻『大覚醒』(Great Awakening, The Works of Jonathan Edwards, vol. 4, 1972)を編集したC. G. ゴーエンの序文にも示されており、ピューリタニズムをアメリカ的アイデンティティ創出の要となつた閉ざされた体験として見るミラーの見解は次第に修正されて來た。ゴーエンはエドワーズの福音主義(Evangelicalism)を、大陸や英國のリフォームドとの関連の中で展開したものと説明し、イングランド、スコットランドのリバイバルと連動した環大西洋的運動として位置付けた。ここでは、福音主義リバイバルズムを行き渡らせたネットワークの成立をエドワーズの書簡を中心に確認したい。

(1) ニューイングランド・ピューリタンと英國ディセンター

17世紀、ニューイングランドに移住したピューリタン・ノンコンフォーミスト牧師の多くは、新大陸定着後、ヨーロッパや英國のプロテスタント牧師達と書簡による交流を続けていた。ピューリタン第二世代になると、例えば、インクリース・マザー (Increase Mather, 1639-1723) のようにハーヴィードを卒業した後、英國に渡りさらに勉学を続け、やがて植民地に戻り、宗教、政治、文化的に大きな影響力を持つようになる牧師も登場する。ボストン第四教会(ブラトル・ストリート)牧師ベンジャミン・コールマンも、ハーヴィード卒業後イングランドに渡り勉学を継続したコスマポリタン知識人の一人である。

1695年、イングランドに渡ったコールマンはアイザック・ワット等ディセンター(Dissenters)の牧師達と親交を深めたが、同時に、當時イ

ングランドで影響の強かった「寛容主義者」(Latitudinarians)の著作にも触れ、比較的柔軟な福音主義者となる。1699年、ボストン帰還後コールマンは、進取的傾向を持つ会衆が集うことで知られたプラトル・ストリート教会の牧師として直ちに頭角を現した。ロンドンのワット等とは文通による交流を続け、植民地に母国的情報をいち早く知らせる役割をも果たしていた。コールマン宛書簡としてまとめられたエドワーズの『忠実なるナラティヴ』は、コールマンの持つこのネットワークを通じて、イングランド、さらにはスコットランドへと紹介されたのである。

『ナラティヴ』を受け取ったイングランドのディセンターは、エドワーズの明確な反アルミニウス主義を歓迎した。リバイバルの動き 자체は英國でも起きていたのだが、エドワーズの『ナラティヴ』程、アルミニウス主義批判を鮮明にしたリバイバル関連報告はなかった為、ワット等はこれを直ちに印刷出版する価値のある文書と判断したのである。

エドワーズが「アルミニウス主義」と呼ぶ立場が、宗教改革期に論争を起こしたオランダ人、ヤコブス・アルミニウス(Jacobus Arminius, 1560-1609)の神学的な主張とそのまま重なるとは言えない。⁷ 18世紀のカルヴァイン主義牧師達は、神の恩恵を得る為の人間側の努力の有効性、すなわち、救済を得る為の人間の能力の何等かの介在を認める立場を総じて「アルミニウス主義」と呼び、これに対抗的な立場に「カルヴァイン主義」の強調点があることを主張した。

ワット等は、ジョン・ティロトソン大司教(Archbishop John Tillotson, 1630-1694)を代表とする「寛容主義者」がアンギリカンの一大勢力となって行った状況をもアルミニウス主義的傾向と呼び批判していた。雄弁で理性的なティロトソンの説教は、アンギリカンだけでなく、ディセンターの間でも流行した。人間の理性と自由意志を強調する啓蒙主義的傾向も、総じてアルミニウス主義あるいはアリウス主義(Arianism)、ペラギウス主義(Pelagianism)と呼ばれ、高カルヴァイン主義者(High-Calvinists)、福音主義者(Evangelicals)の双方から避けられる傾向にあった。

人間理性の極端な賞揚と自由主義神学の流行を警戒した福音主義的ディセンターの間では、ティロトソン流の雄弁説教に対抗して、「キリストを伝える」("preaching Christ")ことを主眼とした説教を推進しようとの呼び掛けがなされた。⁸ 自由主義的説教者が行うように、哲学者や偉人の言葉を説教に引用して、理性に訴える言葉を語るよりも、聖書の御言葉にのみ依拠してキリストの福音を伝えることを説教の中心に取り戻そうとの運動が推進されたのである。1720年代、30年代には、こうした人々により信仰復興("revival of religion")の呼びかけがされ、英國ディ

センターの福音説教運動は17世紀ピューリタンの回心中心的福音主義 (conversionist evangelicalism) の復興を目指すようになった。⁹

ニューイングランド会衆派も英国ディセンターの動きに直ちに呼応した。エドワーズの祖父ソロモン・ストダード (Solomon Stoddard, 1643-1729) は、ピューリタンの回心中心主義を復興させることを目指した説教改革を行い、コネチカット渓谷リバイバル¹⁰ をリードして行った。ストダードの説教は、17世紀ニューイングランド・ピューリタンのトマス・シェパード (Thomas Shepard, 1605-1649) 等の著作と共に、英国ディセンターやスコットランド長老主義者の間で好んで読まれた。18世紀初頭、イングランド・ディセンターとニューイングランド・ピューリタンは、福音的説教改革の推進、及び、信仰復興運動への関心という2点で協調し、地理的な距離を越えた共有の目標を掲げていたのである。

説教改革に賛同したボストンのコットン・マザー (Cotton Mather, 1663-1728) は積極的にイングランドのディセンター、スコットランド長老派の福音主義者と文通しただけでなく、英語圏説教改革に多大な影響を与えていたドイツ語圏、サクソニー、ハレの敬虔主義者 (Pietist)、オーガスト・ヘルマン・フランケ (August Hermann Francke, 1663-1727) にも直接書簡を送り、助言を仰いでいた。ニューイングランド・ピューリタン会衆派、スコットランド長老派、英國ディセンターは互いを「ユナイテッド・ブレザレン」 (United Brethren) と意識し、説教、出版物、書簡の頻繁な交換により福音主義者間の連絡網を築いて行ったのである。¹¹

イングランドにおいて信仰復興運動の主力となるのは、しかし、ワット等福音的なカルヴァイン主義ディセンターではなく、アングリカン高教会内部で活動を続けたメソジスト (Methodists) とその他、敬虔派 (Pietists) の福音主義者であった。イングランドのリバイバル推進勢力がアングリカン高教会敬虔派となった原因是、その数における絶対的な優位が最大の理由として挙げられる。ニューイングランド会衆派と同じく、英國教会内のノンコンフォーミスト活動にルーツのあるディセンターは、名誉革命以後はいやおうなく独立教会を形成せざるを得ない状況に置かれた。ウィリアムとメアリー即位後、1689年の「寛容令」発布により、ステュアート朝時代の弾圧から一転、その活動は容認されたものの、ノンコングローミストは英國教会内での活動基盤を失う。そして、独立した長老派 (Presbyterians)、会衆派 (Congregationalists)、独立派 (Independents)、バプテスト (Baptists)、クエイカー (Quakers) 等の小さな教派教会を形成して行くのである。これは、ノンコンフォーミストが英國教会体制の完全なアウトサイダーとなることを意味した。独立した教会は形成でき

たものの、少人数の集りではいずれの教派も教会間協力を推進できる程の規模にはならず、18世紀初頭、英國ディセンターはイングランド、ウェールズで全人口の6パーセント程度にしか過ぎなかつた。散在した小さな集りが協力関係を結ぶのは困難極まりなく、リバイバルの推進勢力となり得る力はなかつたのである。¹²

英國信仰復興の中心勢力となるのは後に教派として独立するメソジストであるが、初期メソジストの指導者の中にはカルヴァイン主義者、ジョージ・ホイットフィールド（George Whitefield, 1714-1770）もいた。しかし、神学的に同じカルヴァイン主義者とは言え、英國教会内部に留まつたホイットフィールドに対して、ワット等ディセンターは、その功績を評価しつつも積極的な協力はしなかつた。イングランド信仰復興運動がウェスレー兄弟¹³ やアングリカン高教会内部の敬虔主義者を中心として展開するようになると、ワット等ディセンターは主流の信仰復興運動から次第に疎外される。さらに、ホイットフィールドがカルヴァイン主義を言明し、ウェスレーと活動を共にしないことを公にしてから後は、イングランド信仰復興はアルミニウス主義メソジストを主流として推進されるようになり、アメリカ植民地やスコットランドとは異なる路線を取つて行ったのである。

（2）ニューイングランド・ピューリタンとスコットランド長老派

スコットランド長老派の牧師達は、エドワーズの反アルミニウス主義に共鳴し、信仰復興運動でアメリカ植民地と歩調を同じくする。ウェスレー兄弟にイングランドの地盤を委ねたホイットフィールドも、アメリカ植民地宣教成功の後、スコットランドで歓迎され、植民地とスコットランドを結ぶ環大西洋カルヴァイン主義ネットワークはさらに強化されて行く。

『忠実なるナラティヴ』が英國で出版された頃、リバイバルの旗手として国際的な名声を獲得し始めたエドワーズではあるが、ノーサンプトン教会ではすでに、その熱が冷めつつあつた。1737年5月19日、コールマン宛ての書簡には、「神が大いなる、抗ち難い力で、速やかに見事になされた御業は、かなりしばらくの間、近隣の町々では止まっています。そして私達は確かに、少しずつ、緩慢な低迷へと向かっているのです」¹⁴ と報告した。翌年5月2日付けのコールマン宛書簡でも、「信仰的には、このところ同じような状況が続いています。三年前の状況とは違いますが、かといつてあの大いなる恵みの時以前の状態に戻つたわけでもありませんし、そうならないことを希望しています」¹⁵ と、相変わらずリバ

イバルが沈静化した状態が続いていることを報告している。そのような中、エドワーズは、1738年より新大陸での活動を開始したジョージ・ホィットフィールドに宛てて、ノーサンプトン訪問を促す書簡を送った。

私がお願いしたいのは、来年の夏にニューイングランドで計画されおられる旅行の時に、是非ともノーサンプトンを御訪問頂きたいということです。・・・英国教会で育たれた方が、神秘的で、靈的で、軽蔑され、論破された福音の教えを復興する為に召し出され、真に究極的な敬虔を促すべく、熱意の靈に満たされて、また、そのお働きが大変な成功を収めていることを聞き、魂が新たにされるような思いを抱いております。・・・貴方がシワード氏と共に直接私の家にいらして下さることを希望します。我が屋根の下、特別な客人をもてなす機会を得ることは大きな恵みであり、類いなき天からの喜びだと判断致すのです。¹⁶

ホィットフィールドが英国教会所属の教職である事実は、ニューイングランド会衆派には何等抵抗なく受け入れられた。ひとつは、最も積極的にホィットフィールド招待の指揮を取ったコールマンの柔軟な対応、そして会衆派牧師間における圧倒的な人望によるものと思われるが、エドワーズの手紙にも教派の違いについての競合や抵抗感は全く見受けられない。むしろ英国教会からホィットフィールドのような福音主義者が登場したことを喜んでいることが文面から推察できる。ワット等、英国ディセンターとニューイングランド会衆派の牧師達とでは、アンガリカン伝道者ホィットフィールドの受け入れ方に違いがあったのだ。

ホィットフィールドとの文通は、1740年の伝道者の第一回ニューイングランド旅行に先んじて開始していたが、しかし、エドワーズの関心は英語圏に留まらなかった。1740年6月1日、彼は海外事情に通じた植民地書記官で、熱心な福音主義者のジョサイア・ウィラード(Josiah Willard)に次のような書簡を送る。

ジョージ・ホィットフィールド牧師の偉大な働きと成功について、また摂理的な出来事や世界中で起きている現在の状況について耳にするところから、聖書に預言されたことも鑑みるに、神は教会の為にすばらしい御業を完成なさろうとしておられることを期待せずにほられません。故に、世界における現在の信仰の状況をもっと良く知りたいと願わされます。ホィットフィールド氏が御親切に送つ

て下さった『ジャーナル』によると、イングランドでは信仰復興に向けて希望的状況があることがわかります。しかし、私が閣下にお願いしたいのは、もしお時間があれば、お煩わせするのは大変恐縮なのですが、世界の他の場所で起きているという噂に関しての情報を、是非私にお知らせ頂きたいということです。¹⁷

エドワーズは広く、大陸ヨーロッパや各植民地の状況に興味を持ち、海外事情に通じたウィラードに、一般では入手できない情報の提供を依頼したのである。書簡はさらに続く。

プロシア王領地で、信仰復興が起きていると聞いてしばらく経ちます。そのようなことが起きているという徴候は、公の印刷物のいくつかから読み取れます。もし閣下が、このことについての具体的出来事に関して御存じでしたら、具体的には是非知りたいと願っております。また、有名な[オーガスト・ヘルマン・]フランケ博士によって開始された、サクソニーのハレでの出来事の展開の最新事情はどういうものなのでしょうか。ボストンのサミュエル・マザー氏が出版されたフランケ博士の伝記¹⁸ 以降、私は何の情報も得ておりません。[ロバート・]ミラー氏が『キリスト教普及史』¹⁹ で、デンマーク人宣教師による東インド諸島でのすばらしい宣教の開始について書いており、その後の状況を大変知りたく思いますが、しかし、9年前、この本が出版されてから以降のことは何も耳にしません。ミラー氏はモスクoviにおける希望に満ちた出来事についてもまた、書いていましたが。²⁰

エドワーズの関心は英語圏のリバイバルに留まらず、同時代、ヨーロッパとその植民地を含む大西洋世界での宣教活動にあった。おそらく、この時、既にエドワーズには後に取りかかる『救済の業の歴史』(*History of the Works of Redemption*) の構想、そして千年王国到来への思惑があったと思われる。ニューイングランドが植民地から英国のプロヴィンスとなつて行く18世紀中期、エドワーズはピューリタンの祖先より継承した信仰が低迷を抜け出る道筋を、リバイバルの国際的広がりと福音主義の普遍的な伝播の中に見出そうとしていたのである。

1740年10月17日、第一回ニューイングランド旅行途上、ホイットフィールドは約束通りノーサンプトンのエドワーズを訪問する。すでにコールマンのボストン第四教会（プラトル・ストリート）やトマス・

フォックスクラフト (Thomas Foxcroft) が牧師を務める第一教会（オールド・プリック）で歓迎され、大きな成功を収めたホイットフィールドは、ノーサンプトンでもエドワーズの期待通り、人々の心をつかんだ。

同年12月14日付けのホイットフィールド宛の書簡で、エドワーズは、「この地での信仰状況に関して、喜ばしい実りをお知らせ致します。… 貴方がいらしたのと同時に救済が我が家を訪れました」と、自身の子供のひとりが回心したこと、町の若者達を中心に、ホイットフィールドの強い影響を受けたこと、よって伝道旅行が「成功した」ことを報告した。²¹ こうして、ホイットフィールド來訪により、1840年から41年にかけてのノーサンプトン・リバイバルをエドワーズは再度経験したのである。²²

ホイットフィールドは植民地各地で歓迎されたものの、同時に、あまりにも顕著な大衆的人気は、行く先々で「熱狂主義」(enthusiasm) の批判を招いた。ニューイングランドでも巡回説教者によるリバイバルを引き続き指示するか否かについて、会衆派牧師間で議論となり、支持と不支持への分派が始まる。こうした中、激情的な説教で知られたギルバート・テネット (Gilbert Tennent, 1703-64) もホイットフィールドの勧めでニューイングランドを訪れ、論争に拍車を駆けることになった。²³

ジェイムス・デイヴォンポート (James Davenport, 1716-1757) のように明白に奇異な行動を取る人物に対しては、エドワーズやコールマン等リバイバル推進派牧師も公に批判したが、リバイバル集会に伴い、聴衆が体験したと語る幻 (vision)、トランス (trance) の解釈を巡っての対立は深まる。リバイバルが民衆的体験として浸透するに従い、熱狂的傾向はさらに増し、それに伴う超自然的な聖霊体験が報告されるようになると、批判の声は次第に強まっていった。この状況を鑑み、1741年9月10日、エドワーズはイエール大学の卒業式説教として『神の聖霊の特徴的しるし』(*The Distinguishing Marks of a Work of the Spirit of God*)²⁴ を語り、真の聖霊の業にはどのような特徴が伴うのかとのテーマでリバイバルの擁護をした。こうした問題を抱えながらも、エドワーズの関心は、すでにニューイングランドの信仰復興という地域的な出来事を越え、世界のリバイバルの動きに移行していた。その期待に応じるように1740年代、スコットランド信仰復興が開始した。

前述した通り、エドワーズの『忠実なるナラティヴ』は1738年、スコットランドで出版されベストセラーになっていたのだが、ノーサンプトン・リバイバルと近似した出来事が、1740年代、スコットランドで始まる。グラスゴー近郊、カンブスラングのウィリアム・マッカロク (William McCulloch) の教区で始まったリバイバルはたちまち近郊に広まった。詳

細は体験者のひとりであるキルサイスの長老派牧師ジェイムス・ロウブ (James Roeb) により、『忠実なるナラティヴ』²⁵ と題され、エドワーズの『ナラティヴ』と同じく書簡形式の報告文で、トーマス・プリンス・ジュニア (Thomas Prince, Jr.) がボストンで発行を始めた『クリスチャン・ヒストリー』(Christian History) に、1743年3月から44年にかけて連載された。カンプスラングからたちまち近郊に広まったリバイバルにおける人々の様子をロウブは次のように描写している。

覚醒された幾人かの人々は身体が震えたり、失神したり、幾人かの女性達にはヒステリー症状も見られました。他に、神の怒りを知りそして怖れて痙攣を起こす者もいました。人々は罪のもとにあることを自覚し、その責任が自分にあるものと感じたのです。²⁶

スコットランドでもニューイングランドと同じく、リバイバルの引き起こす極端な民衆の反応に対し「迷妄だ」とのリバイバル批判が起きていることをロウブは語っている。

アメリカ植民地における聖霊の現れとまさに同じ状況が起きたので、同じように、我々の間での神の現れに反対を申したてる人が出てきています。丁度この時に、ニューイングランド、ノーサンプトンの福音牧師、賢明なるエドワーズ師が『神の聖霊の特徴的しるし』と題して語った説教が出版され、こうした反対に適切な応答をなしたのです。それ以降、これに付け加えて反論する必要はなくなりました。この説教はプリテン北部で何度も再印刷され、これまでもまたこれから多くの人の手に渡ります。²⁷

ロウブは、リバイバルの先行者としてのエドワーズに敬意を払い、スコットランドの状況がニューイングランド・リバイバルを踏襲するものであることを、寄稿文中主張している。リバイバルを通じての連帯により、ロウブ、マカロックを始めとするスコットランド信仰復興の指導者達は、エドワーズと、文通によりそれぞれの体験、そして神学的考察を交換することになった。

エドワーズはマッカロックに宛てた書簡の中で、「私達は神が驚くべき働きをなさっておられる時代に生きています。その点で、我々の時代は前の世代とは異なるのです」²⁸ と、信仰復興を地域的に特殊な出来事というよりも世代的に特別な体験として語っている。さらに同じくマッカロ

ク宛の別書簡では、「最近起きた素晴らしい信仰復興は聖書に預言されたあの栄光の時代の前兆で、そして光の夜明けの曙であり、やがてこれが進めば、教会の終末時代の栄光が遂にもたらされるのではないかと見ておりました」²⁹と、リバイバルと千年王国到来を結び付けた解釈を示した。

一方、ニューイングランド会衆派ではボストンの伝統的エリート階級の中からエドワーズに挑戦する人物が登場した。ボストンで最も伝統ある第一教会のチャールズ・チョウンシイ (Charles Chauncy, 1705-1787) がその人で、以後、エドワーズ最大の論敵となる。チョウンシイによるリバイバル批判書、『ニューイングランドの信仰に関して時宜に思う』 (*Seasonable Thoughts on the State of Religion in New England*, 1743) は、エドワーズ支持者を多く抱えるスコットランドの友人に宛てた書簡形式で出版された。リバイバルへの賛成、反対と、立場は別にしても、ニューイングランド会衆派を代表する両牧師共にスコットランド長老派との一致を目指していたのは明らかで、18世紀初頭、両地域のカルヴァイン主義者がかなり緊密な同胞意識で結ばれていたことが解る。

スコットランドのリバイバルは、ホィットフィールド訪問によりさらに盛んとなる。アメリカ植民地で成功をおさめたホィットフィールドは、イングランドをかつてのオックスフォード・メソジストの同志ウェスレー兄弟に委ね、自身は次第にその活動地盤を、ウェールズとスコットランドに求めていった。こうして、ピューリタン・ニューイングランドの環大西洋交流ネットワークはリバイバル初期の英国ディセンターとの交流から、スコットランド長老派とのより強い結束へと展開していくのである。

2. 大覚醒期の植民地間交流 —ニューイングランドと中部植民地—

18世紀、中部植民地へと移住したアイルランドやスコットランドからの長老派系移民達も、独自の環大西洋ネットワークを形成して行くが、それがある程度の力を備えるようになるのは第一次大覚醒後である。リバイバル中心勢力の長老派が協力し、1746年、福音的牧師養成機関としてカレッジ・オヴ・ニュージャージィ (College of New Jersey、後のプリンストン) を創立する。これにより、長老派は新大陸に於ける知的交流の中心的な機関を本格的に獲得し、ニューイングランド会衆派に比肩する足場を持つことになった。しかし、こうした動きは、ニューイングラ

ンド・ピューリタンとの融和協力の中で次第に育成されて行ったものであり、18世紀の中部植民地移民が独自に築いたものではない。会衆派牧師であったジョナサン・エドワーズが晩年、大変短期間であったが、カレッジ・オヴ・ニュージャージイの学長として招聘されたこともニューイングランド会衆派と中部植民地長老派との緊密な関係を象徴する出来事と言えよう。

エドワーズは『忠実なるナラティヴ』の中で、ニューイングランドと似た信仰復興が、中部植民地でも起きていることを紹介した。

この聖なる恵みの降り注ぎはさらに広範囲に渡っています。ジャージイでも規模は決して小さくありません。私がニューヨークにいた時（その年、健康上の理由からそこにいました）会う機会のあったジャージイの幾人かの人々によってそれを知らされました。このことに特に関心が深いと見受けられた牧師、ウィリアム・テネント師が、クロス師という人物の牧会の下で起きたマウンテンズと呼ばれる場所での多くの人々の大覚醒（“very great awakening of many”）について私に教えてくれました。そして、また別の場所では、テネント師の兄ギルバート・テネント師の牧会の下でも大変な信仰復興が起きていると言うことでした。さらに、別の場所では、大変敬虔な若い紳士でオランダ人牧師、フリーリングハウザ（“Freelinghousa”）と言う名前だと記憶していますが、この人の牧会の下でも起きていると言います。³⁰

エドワーズがこの時のニューヨーク滞在中会ったウィリアム・テネント・ジュニア（William Tennent Jr., 1705-1777）は、兄ギルバート・テネント、父ウィリアム・テネント・シニア（William Tennent, Sr., 1673-1746）と共にアイルランドのアルスターから1718年、中部植民地に移住したスコッチ・アイリッシュ系移民である。中部植民地リバイバルはこのテネント親子を中心とし、さらにホイットフィールドの協力を得て進行する。

（1） 中部植民地長老派教会の成立

長老派系移民は、すでに英国による植民初期から東部海岸の各地に渡っていた。³¹ 1625年から1640年代にかけてピューリタン・ニューイングランドに移住した長老派系移民は、多くの場合会衆派教会にそのまま融合して行ったが、コネチカットでは長老主義志向は継続して保たれていた。17世紀末以降、長老派系移民の多くがニューヨーク、ニュー

ジャージィ、ペンシルヴァニア等中部植民地を目指した為もあり、「中会」(presbytery)、「大会」(synod)組織を築く地盤は中部植民地にできる。

1701年、フィラデルフィア最初の長老派教会は、マサチューセッツ、賓ガム出身で、ハーヴィードの卒業生、ジェデディア・アンドリュース (Jedediah Andrews, 1674-1747) により建てられる。その後、1706年、アイルランド、アルスター出身のスコットランド系移民フランシス・マケミー (Francis Makemie, 1658-1708) のリーダーシップの下、フィラデルフィアで最初の中会が組織される。スコットランドで長老派牧師になる為の神学教育を受けたマケミーはグラスゴー大学卒業後、アイルランドのラガン中会 (The Presbytery of Laggan) で按手を受け、宣教師として植民地に派遣された。東海岸各地、及びバルバドスでも宣教活動を行い、やがて中部植民地に居を定め、長老派教会組織化の中心となる。

中会組織第一段階における構成員は、イングランド出身のジョン・アンドリュース (John Andrews)、ニューイングランド出身のジョン・ウィルソン (John Wilson) と A.N. テイラー (Taylor)、スコットランド出身のジョージ・マクニッシュ (George McNish)、スコッチ・アイリッシュのジョン・ハンプトン (John Hampton)、サミュエル・デイヴィス (Samuel Davis) と、英本国及び植民地の様々な地域の出身者であった。また、ウェールズ出身の牧師2名もすぐに加えられる。

1716年、フィラデルフィア中会はニュー・カッスル、ロング・アイランド、スノウ・ヒル³² の各中会と共にフィラデルフィア大会 (Synod of Philadelphia) を形成する。この頃、北アイルランドからのスコッチ・アイリッシュ系移民の大規模移住が開始する。しかしながら、経済的問題を抱えて大挙して押し寄せ、貧困と新大陸への適応の困難の中にある移民の内から、大会や中会で働くことのできる牧師を確保するのは非現実的であった。誕生したばかりのフィラデルフィア大会では牧師補充を、イングランド、あるいはニューイングランドに頼らざるを得なかった。こうした状況下、地理的な近さもあり、ハーヴィード、イエールで教育を受けたニューイングランド出身者がおのずと台頭し、中部植民地長老派の草創期は、ニューイングランド・ピューリタンの強い影響下に置かれることになったのである。

初期の中部植民地プレスピテリアンへのニューイングランド・ピューリタンの影響は、ウェストミンスター信条の採択程度を決めた1729年の「採択令」(Adopting Act) に如実に反映された。この決議ではウェストミンスター信条および教理問答は「すべからく肝要かつ必須条文であり、健全な言葉により相応しい形式とキリスト教教義の構成を持つもの」と

しながら、しかし、按手を受けようとする牧師が信条のいづれかに応じられないと申し出た場合は、牧師任命にあたりその申し出の妥当性を按手委員会が検討するとの付帯条件が付けられた。³³

この時代、北アイルランド長老派教会は全教職者にウェストミンスター信条への全幅的同意を要求していた。これに対し、ニューイングランド出身で、フィラデルフィア中会の主要牧師であったジョナサン・ディキンソン (Jonathan Dickinson, 1688-1747) は、アイルランド的な信条主義の方向に向かうことに反対した。彼はキリスト教信仰、並びに、信仰者の生活における全ての権威は聖書に啓示されたキリストにのみあるとの立場を主張し、ウェストミンスター会議の歴史的意義や信条の教義的重要性を認識しながらも、過度の信条主義導入に反対した。

スコッチ・アイリッシュ系及びスコットランド系移民と、ニューイングランド出身者との間の信条を巡る対立は、ニューイングランド側の主張が通ることで落着する。黎明期の中部植民地長老派は、信条主義の強いアイルランド方式ではなく、ディキンソンの提示したピューリタン・ニューイングランド的な聖書主義 (Biblicism) を大会の立場として採択した。また、ディキンソンはウィリアム・テネント・シニアの始めた「丸太小屋大学」(Log College) の理念をカレッジ・オヴ・ニュージャージイの創立へと引き継ぎ、プリンストンの基礎を築くと共に、初代学長として中部植民地の知的中心機関設立に大きく寄与したのである。

(2) 中部植民地リバイバル

1730年代から独立革命にかけては、中部植民地長老派の成長期に当り、これを促進したのが第一次大覚醒である。スコッチ・アイリッシュ系移民のテネント親子の活躍は、先のエドワーズの引用にもあるように中部植民地からニューイングランドでも広く知られて行った。父親のウィリアム・テネント・シニアはアングリカンの教職から長老派に移行した牧師であるが、母国やニューイングランドに依存せずに長老派教職を育成しようと、カレッジ・オヴ・ニュージャージイの前身「丸太小屋大学」を創立し、自らの息子を含め、大覚醒の主要な説教者となる牧師を養成した。長男のギルバート・テネントが著した『未回心者牧会の危険』(*The Danger of an Unconverted Ministry*, 1740) は、論争は呼んだものの回心的福音主義に立脚して書かれたものであり、ソロモン・ストダードやエドワーズ、そして英國説教運動の推進者の主張と共に鳴する。その激しい説教の語調により、多くの敵をも作ることになったが、ギルバート・テネントは中部植民地リバイバリストの中で最も重要な指導者となり、

ホイットフィールドやエドワーズと協調して信仰復興の中心的役割を担って行った。

結論

牧師職を務めていたノーサンプトン教会リバイバルから遡ること10年有余、イエールで神学を修めたばかりの若きエドワーズ最初の赴任先は、ニューヨークの長老派教会であった。自伝にあたる『個人的なナラティヴ』(*Personal Narrative*)には、「1722/3年1月12日、私自身を神にささげる厳肅な決意をした」とある。エドワーズは、「ジョン・スミス氏と、彼の敬虔な母親」³⁴の家に間借りをし、この母子と「甘い信仰の語らいの機会を豊かに過ごした」と告白している。

しばしば、市街を離れハドソン河の岸辺の孤独な場所へ、聖なることを瞑想する為に退き、神と秘密の会話を持った。時々、スミス氏と私は、神について語りあう為に、岸辺と共に散歩した。私達は、この世におけるキリストの王国の進展について、神がその教会に後の日に完成されようとしておられる栄光の事柄についてよく語らいあった。³⁵

1723年4月、ニューヨークを離れることになったエドワーズは、「甘く心地よい日々を楽しんだ家族と街との別れに当り、私の心は深く沈んだ」と記し、さらに、船に乗り、ニューヨークを去る時には街が視界から消えるまでじっと眺め続け、ついに見えなくなった時には「甘さに哀しさが混じったような思いがした」³⁶と感傷的に述べている。中部植民地における長老派教会での牧会経験とスミス家との友情は、エドワーズにとって、若い日々の思い出と共に生涯に渡って重要なものとなったのである。

エドワーズは、長老派宣教師としてデラウェア・インディアンと生活を共にしたディヴィッド・ブレイナード (David Brainerd, 1718-1747)³⁷の日記の編纂にもあたる。テネント、ホイットフィールド、スコットランドの長老派牧師達にあてたエドワーズの書簡を始めとする史料から推察すると、エドワーズの思いは、ニューイングランド植民地におけるピューリタン信仰の興亡といった地域的関心よりもむしろ、教派を越えた国際的な福音宣教の展開にあったことが解る。植民地の区分や大西洋

で隔てられた地理的境界、そして、教派間の境界を越えた交流を続けたエドワーズにとって、ニューイングランド・ピューリタニズムの特殊性やそのアイデンティティは特には関心ある事象ではなかったと思われる。ニューイングランド・ピューリタニズムの「衰退」(Declension)についての「エレミヤの嘆き」(Jeremiad)をリバイバル経験後にエドワーズの著した記録中に求めるのは困難である。彼の関心は、リバイバルを契機として拡大する福音主義プロテスタンティズムの宣教圏の広がりと、さらにそれに続く千年王国への待望にあった。

ペリー・ミラーが指摘するピューリタニズム「衰退」(Declension)から「混乱」(Confusion)の悲観的観測は、少なくともエドワーズ等、大覚醒の指導者達の認識の中心にはなかったと思われる。会衆派、長老派共に、リバイバルへの賛同と批判を巡っての内部分派は確かに生じたので、教派レベルでの「混乱」があったのだと、言えるかもしれない。しかし、リバイバルを経由して、超教派的結束はむしろ強化され、福音主義の連帯によりピューリタニズムは地理的に影響拡大したとも言える。

実際、エドワーズの『忠実なるナラティヴ』は彼の生存中に少なくとも60回印刷され（部分的な出版は除く）、英語圏のみならず、翻訳によりドイツ、オランダのプロテスタントの間でも読まれ、信仰復興に関心の強い大陸敬虔派にも広まった。³⁸ 最も熱心な読者のひとりはジョン・ウェスレーで、神学的には立場の異なるエドワーズの『ナラティヴ』の要約を1744年以降、再度に渡って出版した。その後、1827年にはメソジストの『クリスチャン・ライブラリイ』にも加えられメソジストの必読書となった。³⁹ また、ニューイングランドの共同体レベルでは、リバイバル後のノーサンプトンで開かれた「契約更新」(Covenant renewal)の儀式⁴⁰ が示すように、ピューリタニズムの伝統は、変容しつつも継続的に確認される「契約」の概念のもと、18世紀においても共同体ごとに継承された。フロンティアの移動と共に、リバイバリズムと敬虔主義を備えた新しい形の「ピューリタニズム」がニューイングランドからの移住者により、西部地域にも伝播されていったのである。ピューリタニズムは北米植民地の社会的変動の中で、敬虔主義とリバイバリズムの新たな活力を備え、たくみに変容しつつ次世代に向けての適応に一応の成功を遂げたと言えよう。エドワーズの書簡は、ピューリタニズムの一翼が福音主義に適応し、その影響圏を拡大した模様を如実に伝えているのである。

Notes

- 1 Jonathan Edwards, *A Faithful Narrative of the Surprising Work of God in the Conversion of Many Hundreds Souls in Northampton, and the Neighbouring Towns and Villages of the County of Hampshire in New-England. In a Letter to the Rev. Dr. Benjamin Colman of Boston* (London: Printed for John Oswald, 1737), reprinted in *The Great Awakening*, ed. C.G. Goen (New Haven and London: Yale UP, 1972) vol. 4 of *The Works of Jonathan Edwards*, 21 vols. to date, 130. 以下、引用文献翻訳は筆者による。これに先立つエドワーズからコールマン宛てた、リバイバルについての報告の手紙は、1735年5月30日付けで送られた。Jonathan Edwards, *Letters and Personal Writings*, ed. George S. Claghorn (New Haven and London: Yale UP, 1998) vol. 16 of *The Works of Jonathan Edwards* 参照のこと。1736年にエドワーズが再度、*A Faithful Narrative*として出版された、より長い書簡を書くに至った事情については、Goen, "Editor's Introduction," *The Great Awakening*, 32-46に詳しい。
- 2 「第三版」は、1738年3刷が増刷出版される。1刷を除いては、ロンドン版に準じ、ワットとガイスによる序文もそのまま掲載された。このアメリカ版に関しては、エドワーズ自身が校正に立ち会った可能性が大きいとの判断を、イエール版編集者ゴエンはなしてている。Goen, "Editor's Introduction," 38.
- 3 *A Faithful Narrative*, 147-149.
- 4 Perry Miller, *The New England Mind: From Colony to Province* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1953), "Book 1. DECLENSION," "Book II. CONFUSION" の構成。
- 5 David D. Hall, "On Common Ground: The Coherence of American Puritan Studies," *William and Mary Quarterly*, 3rd ser. XLIV (1987): 193-229 参照のこと。
- 6 Ned C. Landsman, *From Colonials to Provincial: American Thought and Culture, 1680-1760* (Ithaca and London: Cornell UP, 1997) 4. "Reformed" の和訳は「改革派」であるが、現存の教派教団名との混同を避ける為に「リフォームド」とカタカナ表記する。また、欧米での使用例に準じて、「カルヴィニズム」も「リフォームド」の同義語として用いる。
- 7 Goen, 4-18. アルミニウス主義はカルヴァイン主義に対する外部の敵と理解されていたが、ニューイングランド・ピューリタニズムの伝統の中で、潜行的に育成されていたとも言える。ゴエンも論じているが、ニューイングランド・ピューリタニズム正統主義で採用した「救済準備主義」(Preparationism) 自体が、アルミニウス主義の傾向を生み出す要因となったとのアイロニカルな指摘もある。特に、エドワーズに先行するコネチカット渓谷リバイバルの中心牧師、ソロモン・ストダードは、救済準備主義に基づき、自らの罪について「譴謫」(humiliation) の段階を経ることが、救済の恩恵に預かる為に必要との主張をし、罪意識を自覚させる方向で説教改革を行った。神の主権の絶対性を強調したカルヴァイン主義者でありながら、救済準備主義を採用することで、救済における人間の側のある程度の闇与を認めていく方向へと道を開いたとも言える。すなわち、ストダードも、カルヴァイン主義内部でアルミニウス主義を無意識に育成したニューイングランド・ピューリタンのひとりと言えよう。エドワーズの救済論とアルミニウス主義との関係については森本あんり『ジョナサン・エドワーズ研究』(創文社、1995年) 第四章を参照のこと。

- 8 この運動の為の手引き的な書物はJohn Jennings, *Two Discourses: The First of Preaching Christ; The Second of Experimental Preaching* (1723) で、アイザック・ワットが序文を書いた。
- 9 Michael J. Crawford, *Seasons of Grace: Colonial New England's Revival Tradition in Its British Context* (New York and Oxford: Oxford UP, 1991) 53-54.
- 10 エドワーズのノーサンプトン・リバイバルに先行する主要なコネチカット渓谷リバーバル、「魂の収穫」(spiritual harvests) と指導的役割を果たした牧師は次の通り。1712年ハートフォード(コネチカット)第一教会ティモシー・ウッドブリッジ牧師；ノーサンプトン(マサチューセッツ)ソロモン・ストダード牧師。1715-6年イースト・ワインザー(コネチカット)ティモシー・エドワーズ牧師。1716年プレストン(コネチカット)サルモン・トリート牧師。1718年ノーサンプトン、ストダード牧師；ノーウィッチ(コネチカット)第一教会ベンジャミン・ロード牧師。1721年フランクリン(コネチカット)ヘンリー・ウィリス牧師。ノーウィッチ(コネチカット)ロード牧師。プレストン(コネチカット)トリート牧師；ワインダム(コネチカット)サミュエル・ホイッティング牧師；ワインザー(コネチカット)第一教会ジョナサン・マーシュ牧師。1726-7年ウッドベリー(コネチカット)アンソニー・ストダード牧師。1727年ニューミルフォード(コネチカット)ダニエル・ボアドマン牧師。1729年ワインダム(コネチカット)ホイッティング牧師。1731-2年ハドレー(コネチカット)アイザック・チョウンシ牧師；ライム(コネチカット)ジョナサン・パーソンズ牧師；ワインダム(コネチカット)ホイッティング牧師。以上参照、Crawford, 108.
- 11 Crawford, 65-70.
- 12 Crawford, 174-179.
- 13 John Wesley (1703-1791)、Charles Wesley (1707-1788) 兄弟はメソジストのリーダー。メソジスト運動はオックスフォード大学で開始する。
- 14 "Edwards to the Reverend Benjamin Colman," (Northampton, May 19, 1737), *Letters*, 67.
- 15 "Edwards to the Reverend Benjamin Colman," (Northampton, May 2, 1738), *Letters*, 77.
- 16 "Edwards to the Reverend George Whitefield," (Northampton in New England, February 12, 1739/40), *Letters*, 80-81.
- 17 "Edwards to Sec. Josiah Willard," (Northampton, June 1, 1740), *Letters*, 83.
- 18 Samuel Mather, *Vita B. August Hermann Francke. . . Cui adjecta est, narratio rerum memorabilium in ecclesiis Evangelicis per Germaniam, etc.* (Boston, 1733) を指す。
- 19 Robert Millar, *History of the Propagation of Christianity and the Overthrow of Paganism*, 3rd ed. (1723, London, 1731) を指す。
- 20 "Edwards to Sec. Josiah Willard," *Letters*, 83.
- 21 "Edwards to Reverend George Whitefield," (Northampton, December 14, 1740), *Letters*, 87.
- 22 1740年のホイットフィールド訪問によるリバイバルについての報告はボストン第三教会牧師トマス・プリンス宛の書簡でなされた。これは、プリンス・ジュニアの編集する『クリスチャン・ヒストリー』に掲載されたと見られる。 "Edwards to the Reverend Thomas Prince," (Northampton, December 12, 1743), *Letters*, 115-127.
- 23 反感をかった説教は、Gilbert Tennent, *The Danger of an Unconverted Ministry*. ベンジャ

The Trans-Atlantic and Inter-Colonial Communication Networks

ミン・フランクリンは1740年、フィラデルフィアでこの説教の第二版を出版した。

- 24 *The Distinguishing Marks of a Work of the Spirit of God, Applied to That Uncommon Operation That Has Lately Appeared on the Minds of Many of the People of This Land: With a Particular Consideration of the Extraordinary Circumstances with Which This Work Is Attended* が正式なタイトル。1741年ボストンで出版された後、1742年にはベンジャミン・フランクリンによりフィラデルフィアで、またアイザック・ワットの仲介によりロンドンでも出版される。その後の8刷の内、7刷は英国で出版、内4刷はジョン・ウェスレーによる要約版。
- 25 *The Christian History*に掲載された記事の題は、James Robe, “*A Faithful Narrative of the Extraordinary Work of the Spirit of God at Kilsyth and Other Congregations in the Neighbourhood.*”
- 26 *The Christian History, containing Accounts of the Revival and Propagation of Religion in Great Britain & America, For the year 1743* (Saturday March 5, 1743). No. 1, 6.
- 27 *The Christian History*, No. 1, 6-7.
- 28 “Edwards to Reverend William McCulloch,” (Northampton, May 12, 1743), *Letters*, 106.
- 29 “Edwards to the Reverend William McCulloch,” (Northampton, March 5, 1743/4), *Letters*, 136.
同書箇中、エドワーズは、「私が千年王国が既に始まっており、それがノーサンプトンで始まったとしばしば語っていると、私に対する中傷的な噂や出版がなされております」と、チャールズ・チョウンシによるエドワーズ批判についても述懐している。エドワーズを批判する文書とは、Charles Chauncy, *Seasonable Thoughts on the State of Religion in New England* を指す。
- 30 *A Faithful Narrative*, 155-156.
- 31 初期アメリカ植民地における長老派の歴史については以下を参考にした。James H. Smylie, *A Brief History of the Presbyterians* (Louisville, Kentucky: Geneva Press, 1996); D.G. Hart and Mark A. Noll, eds., *Dictionary of the Presbyterian & Reformed Tradition in America* (Down Grove, Illinois: IVP, 1999).
- 32 スノウ・ヒル中会は実際には機能しなかった。
- 33 Smylie, 45-46; Hart and Noll, 13-14.
- 34 Jonathan Edwards, *Personal Narrative*, reprinted in *Letters*, 796.
- 35 *Personal Narrative*, 797.
- 36 *Personal Narrative*, 797-798.
- 37 ブレイナードはイエールを中退したため牧師としての任職を拒まれ、The Commissioners of the Society in Scotland for Propagating Christian Knowledge より宣教師として派遣される。
- 38 David D. Hall, “Learned Culture in the Eighteenth Century,” *The Colonial Book in the Atlantic World*, Hugh Amory and David D. Hall, eds. (Cambridge and New York: Cambridge UP, 2000) vol. 1 of *A History of the Book in America*, 1 vol. to date, 414-415.
- 39 Goen, 90-91.
- 40 例えばホイットフィールド来訪によるリバイバル後には「3月に、私は人々を厳肅かつ公の神との契約更新へと導いた」とある。エドワーズが草稿を書いた契約文は、まず教会の主要なメンバー、様々な信仰団体関係者に提示された後、教会で公に署名されたとある。具体的な文面は、“*Edwards to the Reverend Thomas Prince*”

Shitsuyo Masui

(Northampton, December 12, 1743), *Letters*, 121-125 参照のこと。

